

母親の怒り特性が幼児の怒り特性に与える影響

—媒介変数としての感情会話に着目して—

名古屋大学大学院 山 内 星 子

Nagoya University YAMAUCHI, Hoshiko

要 約

本研究は、母親の怒り感情喚起の個人差（怒り特性）が幼児の怒り特性に与える影響とそのメカニズムについて、感情喚起事象に関する会話（感情会話）に着目して検討を行った。研究1では、3～5歳の幼児の母親39名に質問紙調査を行い、母親の怒り特性と子の怒り特性との間に有意な相関関係を見出した。研究2では、研究1の結果をもとに、母親の怒り特性が強く伝達している1例および伝達が弱い1例の計2例を抽出し、母子間の感情会話を事例的に検討した。その結果、感情会話における母親の発言は「社会的ルールの提示」「感情への言及」「ポジティブな評価」の3つのカテゴリに分類された。事例として抽出した2例では、これらの出現頻度、提示順序、量が異なっており、感情会話が媒介変数となっている可能性が示された。

【キー・ワード】 感情特性, 怒り, 感情会話

問 題

近年、感情の平板化や、衝動的な怒りの表出、子どもの抑うつなど、子どもの感情の問題が社会的に取り上げられるようになった。このような問題に対する臨床的援助を考えるにあたっては、感情の発達や、その個人差形成のメカニズムを探る基礎的研究が必要とされている。そこで本研究では、感情に関する問題の中でも特に注目されている怒りに焦点をあて、その個人差形成メカニズムについて実証的検討を加える。

感情研究は Darwin (1872) が感情の表示規則について論じたことに始まり、約 140 年の歴史を持つが、そのアプローチの困難さや、感情が理性よりも低次のものとされてきた経緯から、未だ十分な科学的検証がなされたとは言いがたい。しかし、近年感情のポジティブな働きや、感情と認知との密接な関連が明らかになってきたことから、心理学領域全体で感情に対する関心が高まっている。

このような動向の中で、感情の発達についても徐々に研究が蓄積されてきた。特に、感情理解など、感情の認知の発達、また、感情制御や感情表出など、生じた感情をどのように扱うかといった問題については、近年盛んに研究が行われるようになってきている。しかし一方で、感情そのものの発達に関する研究は大きな進展を見せておらず、ノーマティブな発達のあり方を記述するにとどまっている。Sroufe (1996) の情動発達理論によれば、乳幼児の情動は、初期には未分化な生理的興奮や緊張の表出として始まり、その後分化が進むとされており、怒りは、生後 12 ヶ月で出現する (Camrus, Oster,

Campos, Miyake, & Bradshaw, 1992) という知見が得られている。Sroufeによれば、こうした分化が起こり、感情発達が進行していく際に重要となるのが環境、つまり養育者をはじめとする周囲の他者との相互作用とされているものの、その過程に関する実証的研究は未だ少ない。そこで本研究では、怒り感情の喚起における個人差（怒り特性）の形成に、養育者である母親が与える影響とそのメカニズムについて検討を行う。

Eisenberg, Cumberland, & Spinrad (1998) は、子どもの感情特性の形成に親が影響を与えるメカニズムとして、感情に関する親の会話（感情会話）の影響、親の感情表出の影響という2つのメカニズムの存在を指摘している。前者が言語を介した認知レベルの学習であるのに対し、後者は親の感情喚起場面と子自身の感情が直接的に結びつく、連合学習のような過程を経る行動レベルの学習と考えることができるだろう。

これらのメカニズムについてはこれまでに個別に検討が行われ、それぞれの存在が実証的に示されてきた (e.g., Garner, Dunsmore, & Southam-Gerrow, 2007)。しかしながら、この2つのメカニズムを同時に検討したものはなく、それらの関連や、両者が独自に効果を持つか否かは明らかになっていない。本研究の目的は、この2つのメカニズムを同時に検討に加えることにより、より詳細に怒り特性の形成過程を検討することである。仮説は以下の通りである（図示したものを図1に示す）。

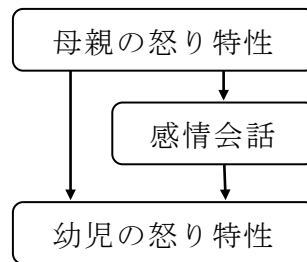


図1 仮説モデル

仮説1：母親の怒り特性は子の怒り特性に影響を与える

仮説2：感情会話は、母親の怒り特性が子の怒り特性に与える影響を媒介する

これらの仮説を検証するため、本研究では2つの実証的検討を行う。研究1では、仮説1を検討するため、母親の怒り特性と子の怒り特性との関連について、質問紙調査による数量的検討を行う。研究2では、研究1の結果をもとに、相対的に仮説1に当てはまる母子とそうでない母子を検出し、それぞれの感情会話を事例として質的に検討することによって仮説2の検証を行うこととする。

研究1

目的

研究1の第1の目的は、仮説1の検証を行うことである。第2の目的は、研究2において事例として取り上げる母子の決定を行うことである。感情会話の媒介効果について検討を行うという目的に沿

い、怒り特性の高い母親×怒り特性の高い子、怒り特性の高い母親×怒り特性の低い子、の2組を抽出する。

方法

対象者 3～5歳児を子に持つ母親39名（平均年齢34.56歳， $SD=3.80$ ；子の平均月齢55.26ヶ月， $SD=10.58$ ）であった。

実施時期 2008年6月～9月であった。

質問紙の構成 ①母親の怒り特性 山内（2008a）で作成した状況的測定ツールに、修正を加えて使用した。山内（2008a）は、より現実場面に近い形での感情特性の測定を目的として、状況を提示し、その場面に出会ったときに感じる感情の回答を求める状況的質問票形式の測定ツールを開発した。測定ツールの例を図2に示す。本研究では、その後の追試研究の結果（山内，2008b）から、測定ツールの信頼性、妥当性を高めるために修正を加えることとした。本研究における修正点は以下の3点である。1点目は、生起する感情を尋ねる項目を、感情選択形式（怒り、悲しみ、喜び、不安、罪悪感から、感じたものに○をつける）から、それぞれの感情について4件法（「感じない（0）」～「とても感じる（3）」）で尋ねる形式に変更した。2点目は、山内（2008a）では12場面であった測定ツールに、新たに4場面を追加し、16場面について尋ねることとした。新たな4場面については、表1に示す。3点目は、対象者の年齢等を考慮し、想像しやすいように表現を修正した（e.g., 授業→習い事）。なお、本研究では、怒り特性項目のみを分析の対象とした。

②幼児の怒り特性 3～5歳児を子に持つ母親19名（平均年齢35.89歳， $SD=4.76$ ）を対象に自由記述形式の予備調査を行い、独自に11項目から成る尺度を作成した（項目を表2に示す）。専門家（保育士2名、臨床心理士2名）による内容的妥当性の検討を経た後、3～5歳児の母親116名より回答を得て、信頼性の検討を行った結果、 $\alpha=.78$ という十分な値を得た（山内・小倉・本城，2009）。本研究では、作成した項目に対して4件法（「全く／ほとんどない（1）」～「いつも／大変よくある（4）」）で回答を求めた。ただし、過去6ヶ月間の様子を思い出して回答するよう教示した。

■以下のエピソードを読んで、問いにお答えください。

あなたは知人にパソコンの使い方を教わっています。

家で練習して、その成果を見せに行くと、
「後から習い始めた A さんの方が、よくできてる」と言われました。

1. この状況で、あなたはどのような感情を抱きますか？

「感じない(0)」～「とても感じる(3)」の中からあてはまるものを一つ選び、○をつけてお答えください。

図 2 測定ツールの例（感情特性項目のみ）

表 1 測定ツールに追加した場面

No.	エピソード	測定する感情
5	あなたとNさんは、親しい友達です。ある資格試験のために、一緒に勉強していました。しかし、試験にはNさんだけが合格し、あなたは不合格になってしまいました。	悲しみ、喜び、恥
18	あなたはスーパーへ向かっています。だいぶ前を歩いていた人がスーパーのドアを開けて振り返ったときあなたに気づいて、あなたが来るまで、しばらくの間ドアを開けて待っていてくれました。	怒り、喜び、不安
19	一人で旅行にやってきました。最終日、帰りの電車を待っているとき、近くに知り合いのBさんが住んでいたのを思い出して、軽い気持ちでメールしてみると、「見送りに行きたいから、1時間くらい待っていて」と返信が来ました。	怒り、喜び
30	あなたは子どもの運動会で、障害走に出ることになりました。競技中、相手チームのメンバーがぶつかってきて、あなたは激しく転倒してしまいました。	怒り、恥、罪悪感

※No. は、山内（2008a）に順ずる

表 2 幼児怒り特性尺度 (11 項目)

項目
1. 欲しいものが手に入らないと、かんしゃくを起こす
2. 遊びを妨げられると、怒ったりぐずったりする
3. 自分の気に入らないことがあると、怒鳴る
4. 自分のしたかったことをさせてもらえないと、物にあたる
5. 嫌いなものを食べさせようとすると、嫌がって怒る
6. 自分のものを汚されたり壊されたりすると、怒る
7. やっていたことを中断させられると、不満そうな顔をする
8. 怒られたり注意されたりすると、むっとする
9. 母親(または主な養育者)が出かけるとき、他の人(例：きょうだい、父親)との留守番を頼むと、嫌がって親にくっつく
10. 他の子どもにおもちゃをとられても、機嫌が悪くならない
11. ゲームなどで負けると、怒ったり、不満を表現したりする

結果と考察

尺度構成 ①母親の怒り特性 測定ツール 16 場面のうち、怒り特性の測定を想定していない場面 No.13 を分析の対象から除外した。15 場面の「怒り」項目について α 係数を検討し、内的整合性を低めていた 6 場面を除外し、9 場面 (場面番号 11, 12, 13, 15, 16, 21, 23, 28, 30) を採用した。9 場面の「怒り」項目の得点を単純合計し、怒り特性得点とした。 α 係数と基本統計量は表 3 に示す。

②幼児の怒り特性 幼児の怒り特性尺度 11 項目について、因子分析 (主成分分解, プロマックス回転) を行った。固有値の減衰状況 (4.61, 1.39, 1.19...) から、1 因子性が確認された。11 項目の得点を単純合計したものを、尺度得点とした。 α 係数と基本統計量は表 3 に示す。

表 3 各尺度の基本統計量と α 係数

	項目数	<i>M</i>	<i>SD</i>	α 係数
母親怒り特性	9	6.77	3.06	.61
幼児怒り特性	11	21.94	5.70	.82

母親の怒り特性と幼児の怒り特性との関連 母子間の怒り特性の関連を明らかにするため、相関分析を行ったところ、有意な正の相関関係が見出された ($r=.38, p \leq .05$)。散布図を図 3 に示す。この結果は、親の感情特性が子の感情特性に影響を与えることを指摘した先行研究 (e.g., Eisenberg, Cumberland, & Spinrad, 1998) と整合的である。研究 2 では、この影響を媒介するメカニズムについて感情会話に着目した検討を行う。その目的に沿って、散布図から、2 組の母子を抽出した。すなわち、(I) 母親、子、共に怒り特性の高い母子および (II) 母親の怒り特性は高いが、子の怒り特

性が低い母子の2組である（図3に抽出する母子を示す）。

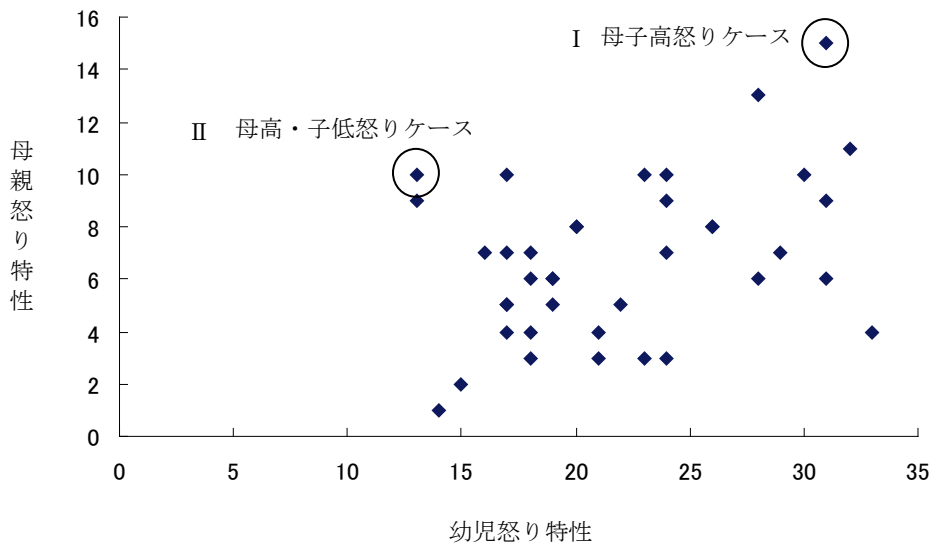


図3 散布図

研究2

目的

研究2の目的は、研究1で見出された、母親の怒り特性と子の怒り特性との関連について、感情会話の媒介効果に着目してメカニズムを詳細に検討することである。具体的には、母親の怒り特性が子に伝達している母子と、そうでない母子の2組の感情会話を事例的に検討し、量および内容の面から考察する。

方法

対象者 I（母子ともに高怒り特性）：5歳女兒とその母親，II（母高怒り特性ー子低怒り特性）：3歳男児とその母親の2組の母子であった

実施時期 2008年7月および8月であった。

材料 4場面から成る紙芝居を3話分用意した。4場面のうち、始めの3場面には裏面に文字によるエピソードと縮小した表面の絵を添付したが、4場面の裏面には、「このページは自由にお話を作って聞かせてあげてください」という教示を記載した。紙芝居のエピソードは、Root & Jenkins (2005), Crick & Dodge (1996), Gomez, Gomez, DeMello, & Tallent (2001) で使用された子ども向けの日常的エピソードを参考に、3～5歳の幼児が理解できるように留意しながら作成した。母親による感情会話に個人差が出やすいよう、相手の意図や状況があいまいになるよう意図した。なお、本研究では、怒りに焦点をあてた検討を行うという目的に添い、怒りに関する感情会話の測定を意図

して作成された場面 A および C のみを分析の対象とする（場面 A および場面 C の絵とエピソードを図 4 に示す）。

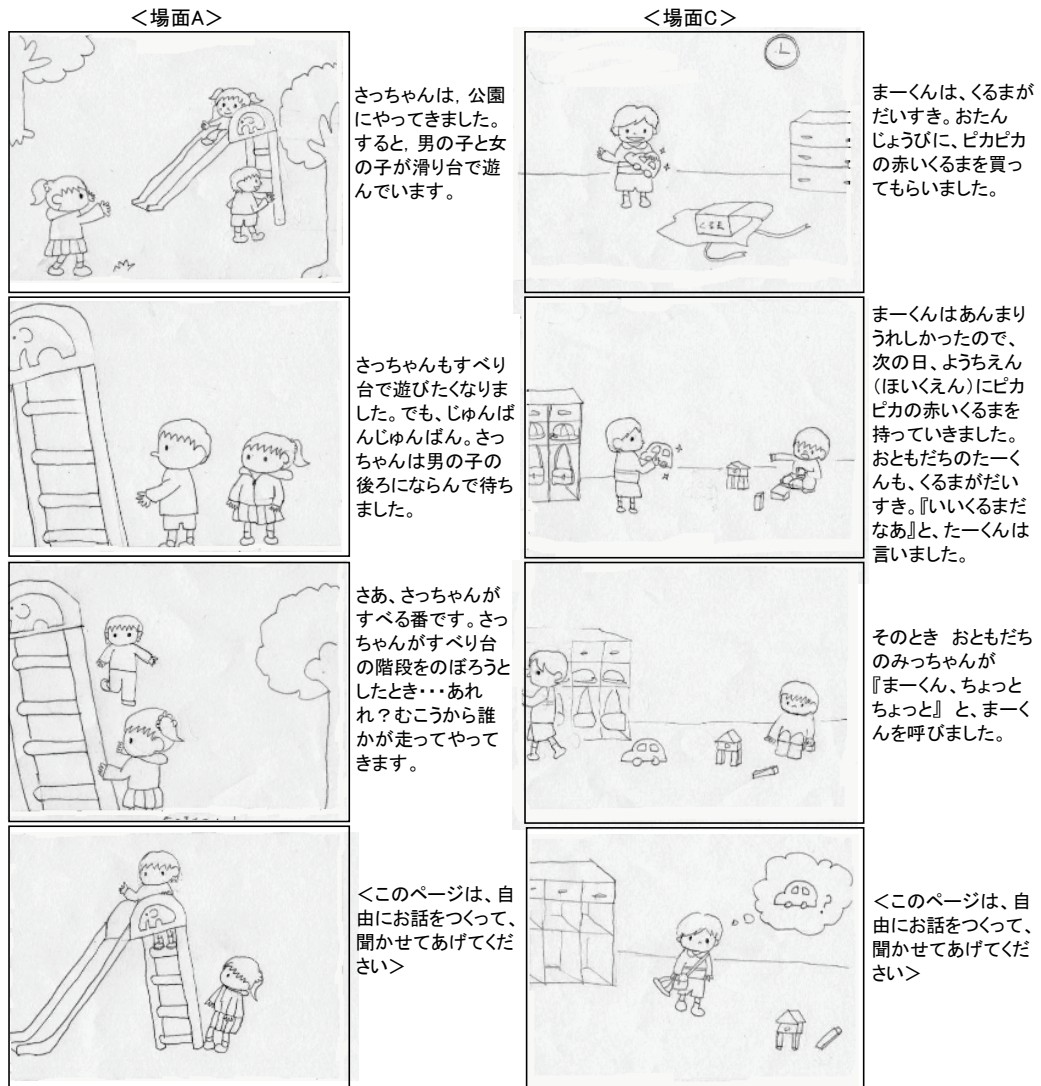


図 4 紙芝居

手続き A 大学附属心理相談室の面接室にて、母子が感情会話をを行う様子を観察した。観察が始まる前に、研究に際して得られた個人情報および映像は厳重に管理されること、参加をやめなくなったらいつでもやめられることを説明し、同意書にサインを得た。母子はテーブルを挟んで直角の角度で座り、紙芝居は母親が持って、絵が描かれている面を対象児に見せるよう指示した。面接室には、対象児から見えない位置に観察者が同席し、同意を得てビデオカメラで録画した。

以下のような指示を行い、母親および対象児から質問がないかどうかを確認した後、母子のタイミ

ングで紙芝居を開始するよう依頼した。「これからお子様に紙芝居の読み聞かせをしていただきます。紙芝居には、4枚の場面からなる短い物語が3つ含まれています。それぞれの物語の3枚目までは、このように(裏面を見せながら)場面の説明を書いてあるので、紙芝居形式で読んであげてください。最後の4枚目は、場面の説明を書いていないので、絵に合うようなお話をお母様が自由に作って、聞かせてあげてください。それぞれの物語を読みながら、または、読み終わってから、その物語の内容や登場人物の気持ちについてお子様と話し合いをしてください。1つ1つの場面でどんなことが起こったのか、なぜそのようなことが起こったのか、主人公や他の登場人物はどんなことを考えたり、感じたりしているのか、といった点について、お子様が理解できるように詳しくお話ししてあげてください」。1場面につき5分程度を目安とすること、どの場面の解釈や作話にも正解や望ましい回答は存在しないことを説明した。

結果と考察

発話数 母子の相互作用を量的に分析するため、紙芝居の本文以外の母親の発話数をカウントした。発話は、1文を1発話とカウントした。なお、「うん」「ああ」「ね」等の単純なあいづちは除外した。その結果を表4に示す。I、IIの母子で発話数の比較を行ったところ、子の発話数にはそれほど差がなかったものの、母親の発話数については、IIの母親はIの母親の約2倍発話していた。

表4 場面ごとの発話数

		場面		計
		A	C	
I	母	29	51	80
	子	9	18	27
II	母	68	95	163
	子	13	22	35

感情会話の質的分析 2組の親子の感情会話を比較した。

まず、ビデオカメラに録画された映像を元に、2組の親子の感情会話を逐語記録した。次に、感情会話の内容がゆがめられないように、できるだけ語られた単語を用いて解釈を含めずに要約した。感情会話は母親が紙芝居の3場面目を読み終わり、4場面目を子どもに提示した時点から、母子のタイミングで次の紙芝居に移るまでとした。

場面Aの感情会話 場面Aの感情会話の要約を表5に示す。Iの母親は、4場面目を「(さっちゃん)が男の子を先に滑らせてあげた」場面と解釈した。それを「(さっちゃん)はやさしい」と評価した子どもに対し、相手の社会的ルールからの逸脱を指摘「(さっちゃん)は待ってた)」し、いかに自分の権利を守るかといったことや、葛藤場面に対してすべき行動を子どもが理解し、自分の口で発言することを促した。一方、IIの母親は、「(さっちゃんが順番を)とられちゃった」と、相手が主人公の目的を妨害した点について明確に言及した。しかし、相手の意図については「やりたかって思ったの

かも」と、主人公を妨害する目的ではなかったことを述べた。また、感情に関する言及が多く、主人公の悲しみや驚きについて触れ、丁寧に子どもに説明を行った。社会的ルールの提示については、相手の意図や、主人公の感情について言及した後に行った。

この結果から、Ⅰの母親は感情や場面をポジティブに評価することよりも、社会的ルールの定着に重点を置いた会話を行ったと言える。一方でⅡの母親は、「嫌な気持ちになる」「悲しい」等、主人公にネガティブな感情が生起することに言及しつつも、相手が意図的に主人公を妨害したわけではないという評価を話し、状況のできるだけポジティブな評価を促した。

表 5 場面 A の感情会話

Ⅰ（母子高怒り特性）	
	[場面 4 を提示]
母	: <u>走ってきた男の子を先に滑らせてあげました</u>
子	: やさしい
母	: でも、さっちゃん待ってた 順番だよってお話しなくてもいい？ ○○ちゃん（子どもの名前）はいつもどうしてる？
子	: 先生が言ってくれる
母	: 自分で言わなくていい？
子	: ○○が言うときもある この話では、さっちゃんがやさしいからいいかもしれないけど 本当はどうしたらいい？
子	: 本当は自分が先に滑って、後で男の子が滑ったらいい
母	: 男の子が嫌だって言ったらどうする？ 何を教えてあげる？
子	: ちょっと待ってねって言う
母	: 順番だよって教えてあげるね
Ⅱ（母高怒り・子低怒り特性）	
	[場面 4 を提示]
母	: <u>とられちゃった</u> どうする？ 悲しいね
子	: ありやりや
母	: さっちゃんびっくりする 待ってたのに抜かされて嫌な気持ちになる 抜かされちゃったね
子	: なんで？
母	: （男の子が）やりたいって思ったのかも
子	: ○○ちゃん（子どもの名前）だったら並ぶ
母	: 横入りはしちゃだめ 悲しいから ルールは守らないといけない そうでないと、さっちゃんが悲しい さっちゃんは待ってたのに違う子が来て抜かされた 順番に並んでって言わないといけない けんかしちゃいけない 順番だよって教えてあげました

場面 C の感情会話 場面 C の感情会話の要約を表 6 に示す。I の母親は「車がどこにいったか分かんなくなった」と話した後すぐに「買ってもらった車、持って行ってもよかった？」と社会的ルールに言及した。また、全体を通して、車が紛失したことの責任の所在や、主人公が社会的ルールから逸脱していた点、および、社会的ルールに則ればどのように行動すべきであったかといった点への言及が多かった。一方、II の母親は、車がないという状況に対し、「困ったね」と主人公の気持ちを語った後、「持ってっちゃだめだったよね」と社会的ルールに言及した。その後の会話は、困っている現状をどのように解決すべきかという点に焦点が当てられてた。また、場面 A と同様に「た一くんが、なくなったらいかんと思って見ててくれてるかも」と、相手が主人公を意図的に妨害したわけではないという評価を語った。

I の母親が社会的ルールを重視した会話を行った一方で、II の母親が、主人公の感情やポジティブな状況の評価について多く言及するという、場面 A と同様の特徴が見られた。

表 6 場面 C の感情会話

I (母子高怒り特性)	
[場面 4 を提示]	
母 :	車がどこにいったか分かんなくなった 買ってもらった車、持って行ってもよかった？
子 :	だめ
母 :	なくなっちゃった どうする？
子 :	(た一くんが) とっていつちゃった
母 :	とっていったと思って怒りに行くより、どうすればいい？
子 :	た一くんがどこに行ったか書く
母 :	確認しに行く？ 知らなかったら？
子 :	違う子がとった
母 :	でも、本当は持っていくべきじゃない ま一くんはこれからどうしたらいい？
子 :	見せるだけならいい
母 :	見せようと思って持ってきたのがいけなかった
子 :	ちょっとならいい
母 :	持っていてもいい？
子 :	だめ
母 :	どうする？
子 :	持っていかない
母 :	せっかくの車を誰かが壊すと悲しい ま一くんはこれからどうしたらいい？
子 :	ちょっとはいいけど、いっぱいはだめって言ってあげる お家には持っていけないでねって言う
母 :	じゃあ持っていくの？ 大切なものは持っていけないようにしようね きっと見つかると思う そうでないと悲しい

Ⅱ (母高怒り・子低怒り特性)

[場面4を提示]

- 母：車がない
どこいったんだろう
探してます
困ったね
探さないといけない
一生懸命探しました
たーくんに聞いてみよう
いくら嬉しいからって、持ってっちゃだめだったよね
- 子：〇〇ちゃん(子どもの名前)持っていったい
- 母：持っていったないもんね
(持っていくのは) いかんけど、ないから困った
どうする?
- 子：たーくんが遊んでた
- 母：たーくんがいて、車置いといたね
でも、戻ってきたらない
たーくんに聞かないと
- 子：(たーくんが) おうちに持って帰った
- 母：帰ってないと思う
たーくんに聞かないと
- 子：聞かない
- 母：自分で探す?
お母さんだったら、まずは自分で探すけど、たーくんにも相談する
先生に言う
たーくんが、なくなったらいかんと思って見てくれてるかも
(たーくんが) いいなって思って遊んでるかも
- 子：この中(棚)に入ってる
- 母：しまわれちゃったかも
出てくるかな?
- 子：わかんない
- 母：見つかるといいけど
でも、持ってきたのはいけなかった
- 子：間違えたりする
- 母：お友達が間違えちゃうかも
- 子：〇〇は、幼稚園から帰るまで我慢する
- 母：我慢して、お家に置いとかないかんかったね

感情会話の考察 以上、2場面における感情会話の分析では、感情会話を構成する要素として、次の3つが見出されたと言える。すなわち、「社会的ルールの提示」、「感情への言及」、「ポジティブな評価」である。

「社会的ルールの提示」は、主に登場人物が社会的ルールに照らして正しい行動をしたか否か、また、そうでなければどのように行動すべきかといった規範を示す内容であった。感情の生起メカニズムを包括的に説明する認知的評価理論では、社会的な規範からの逸脱を検知することが怒り感情の生起にとって重要な要因になるとされている(e.g., Scherer, 2001; Smith & Ellsworth, 1985)。母親による「社会的ルールの提示」は、子どもの社会的規範に関する意識を高めることで、怒り特性の高まりにつながると考えられる。

「感情への言及」は、生起した葛藤により主人公がどのような気持ちを抱くかということについての感情語を用いた説明で構成されていた。これは、最も直接的な感情会話であり、状況や相手に対し

てどのような感情を感じるべきか、ひいては、その感情語によって表される感情がどのようなものかということ子どもに示す。

「ポジティブな評価」は、相手の意図や状況を、ポジティブに再解釈する内容で構成されていた。認知的評価理論では、事象が自己のウェルビーイングにとってどのような意味を持つかという評価が、生起する感情の種類を分けるとされている(Lazarus, 1991)。母親が事象をどのように評価するか示すことにより、子どもの感情を規定する認知的評価の個人差形成を促し、間接的に子どもの感情特性の形成に寄与していると考えられる。

本研究で扱った2例では、これら3つの感情会話の出現順位および量が異なっていた。Ⅰの母子では、「社会的ルールの提示」が主な構成要素であった。これは、母親の、教育的姿勢や社会的ルールからの逸脱への敏感さが背景となっていると考えられる。社会的ルールの逸脱に着目しやすい特性は、目的を妨害されたと感じる機会を増やすことから、怒り特性が間接的に表出されたものとも言えるだろう。また、それを子どもに提示することにより、子どもの社会的ルールへの着目を促し、結果的に怒り特性が伝達していると思われる。

一方、Ⅱの事例では、「感情への言及」→「ポジティブな評価」→「社会的ルールの提示」という順序で感情会話が行われ、主人公の気持ちに言及することや、相手の意図をポジティブに受け取ることと重点が置かれた。また、「感情への言及」では、怒りではなく悲しみや困惑といった感情のみが扱われた。感情会話において、母親の怒り特性や、怒りにつながるような認知的評価は表出されず、子どもに対する語りかけを母親が意図的にコントロールすることができる可能性が示された。

以上より、この2事例は、母親の怒り特性が感情会話に反映されているか否かという点で異なると言え、母子間の怒り特性の伝達が感情会話のスタイルによって媒介されている可能性が示され、仮説2が支持された。同時に、母親が、怒り感情の感情会話への反映を意図的に抑制することが可能であることが示唆された。このことは、子どもの突出した怒り特性に対する予防的な介入の可能性を示した重要な結果であると言える。

総合考察

本研究の目的は、母親の怒り特性が子の怒り特性に与える影響を検証すること、また、その影響過程における感情会話の役割について、事例を挙げて検討を行うことであった。その目的に沿い、質問紙調査によって得られたデータを元に母子間の怒り特性の関連を見出した。また、関連の強い母子と、そうでない母子の2事例をとりだし、その感情会話の特徴を抽出した。以下、結果を整理する。

研究1では、母子の怒り特性の間に有意な関連が見出され、親の感情特性が子の感情特性に影響を与えるという仮説1が支持された。これは先行研究の知見と整合的である。研究2では、感情会話の内容として3つのカテゴリが見出され、感情会話の伝達が強い母子とそうでない母子では、その量および提示順序が異なっていた。母親の怒り特性が同様に強い場合でも、感情会話の特徴によって、子どもの怒り特性の高低が分かれている可能性が示され、母親の怒り特性が子どもの怒り特性に影響する際、感情会話が媒介変数の役割を果たしていることが示唆された。

今後の課題として、以下の4点が挙げられる。まず、1点目に、本研究では、養育態度が感情特性の伝達に寄与している可能性が示された。感情会話の内容だけでなく、母親から子どもへの質問の仕方や、日常生活における養育態度についても検討に含め、さらに検討を行うことが望まれる。2点目に、本研究では2事例のみを取り上げたが、今後はさらに事例数を増やし、本研究の結果の一般化可能性について探ることが必要であろう。3点目に、本研究では母親から子への発話を主に分析、考察の対象としたが、近年では子どもの発達における母子相互作用の重要性が指摘されている。感情会話についても、子どもからの発話が母親の感情会話にどのような影響をおよぼすかという視点を加えた検討を行うことによって、より力動的な伝達過程を検討することが可能になろう。4点目に、本研究では、感情特定の形成という観点から感情会話の分析を行ったため、教育的視点や、しつけといった観点から母親の発言をとらえることはしなかった。しかし、これらの視点は、子どもの発達を支える上で非常に重要な視点である。今後は、これらの視点も検討に含めつつ分析を行う必要がある。

引用文献

- Camrus, L. A., Oster, H., Campos, J. J., Miyake, K., & Bradshaw, D. (1992). Japanese and American infants' response to arm resistant. *Developmental Psychology*, **28**, 589-583.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1996). Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, **67**, 993-1002.
- Darwin, C. (1982/2007). *The expression of the emotions in man and animals*. Chicago: University of Chicago Press.
- Eisenberg, N., Cumberland, A., & Spinrad, T. L. (1998). Parental Socialization of Emotion. *Psychological Inquiry*, **9**, 241-273.
- Garner, P. W., Dunsmore, J. C., & Southam-Gerrow, M. (2007). Mother-child conversations about emotions: Linkages to child aggression and prosocial behavior. *Social Development*, **17**, 259-277.
- Gomez, R., Gomez, A., De Mello, L., & Tallent, R. (2001). Perceived maternal control and support: Effects on hostile biased social information processing and aggression among clinic-referred children with high aggression. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **42**, 513-522.
- Root, C. A., & Jenkins, J. M. (2005). Maternal Appraisal Styles, Family Risk Status and Anger Biases of Children. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **33** 193-204.
- Scherer, K. R. (2001). Appraisal considered as a process of multilevel sequential checking. In K. R. Scherer, A. Schorr & T. Johnstone (Eds.), *Appraisal processes in emotion* (pp. 92-120). Oxford: Oxford University Press.
- Smith, C. A. & Ellsworth, P. C. (1985). Patterns of cognitive appraisal in emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 813-838.

Sroufe, A. (1996). *Emotional development: The organization of emotional life in the early years*. New York: Cambridge University Press.

山内星子. (2008a). 認知的評価・感情喚起の個人差－状況的測定ツールの作成－. 発達研究, 22, 203-212.

山内星子. (2008b). 感情喚起の個人差を規定する要因－母親の認知的評価スタイルに着目して－. 日本発達心理学会第19回大会発表論文集,.

山内星子・小倉正義・本城秀次. (2009). 母親の養育態度および抑うつ傾向が幼児の感情特性に与える影響. 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 印刷中.